

# 第13回 韓・日国立図書館業務交流 基調演説

## 国立中央図書館の現況と課題

ファン・ミョン / 国立中央図書館デジタル情報利用課長

### 1. 序論

昨年も、韓国の国立中央図書館では、国立図書館としての設立理念を基礎にした役割と機能を果たすために様々な計画が策定され、新しいサービスが推進されました。

国立中央図書館の過去1年間の主要な成果としては、図書館利用者がいつでも、どこでも、どんな方法でも図書館の情報と知識の提供を受けることのできるデジタル図書館を開館（2009年5月25日）し、2010年2月には、国で生産されて流通する図書館資料を集中管理し、正確かつ信頼性ある書誌データを構築するために国家書誌センターを設置しました。

また、各国の韓国学司書とのパートナーシップを基盤に、韓国学司書グローバル・ネットワークを構築し、図書館の発展のための教育の場を作ろうと、2009年10月にホームページ(<http://www.nl.go.kr/inkslib>)をオープンしました。そして同年11月には、国内外の地理情報のゲートウェイの役割を担う地図資料室を開室し、増加するデジタル資源への対応策として図書館法を新しく改正し、オンライン資料の収集のための法的根拠を整備しました。

このような一連の活動は、変化する知識情報のパラダイムを受け入れ、現在の利用者のニーズを満たすようにサービスを改善し、利用者の満足度を高めようとする努力だと言えます。

### 2. デジタル図書館開館1周年

国立中央図書館は2010年6月14日から6月15日まで、デジタル図書館開館1周年

を記念する国際カンファレンスを開催しました。知識情報融合時代に対応する新しい図書館サービスのために「図書館、知識社会の力」をテーマとする会議には、国立図書館長会議のペニー・カーナビー議長をはじめ、海外主要図書館館長とデジタル図書館専門家が参加し、急変するデジタル環境と利用者の情報利用形態に伴うデジタル図書館の課題と機会について深い議論を行いました。この会議の詳細な内容はホームページを通じて見ることができます(<http://www.nl.go.kr/conference2010/>)。

参考までに、デジタル図書館は、2002年から5年間の工事を経て2009年5月25日に開館しました。デジタル図書館は、延面積38,014㎡の規模で地上3階、地下5階から成っています。地下4～5階は1,200万冊を収蔵できる保存書庫であり、地下1～3階は利用者のためのサービス空間、地上1～3階は事務用スペースとして構成されています。デジタル図書館は、物理的な空間である「情報広場」とデジタル仮想空間である「ディブライポータル」で構成されており、デジタルとアナログを融合するサービスを提供しています。

続きまして、韓国の国立中央図書館が、デジタル情報社会の変化の様相を予想し、それに効果的に対応するために推進している重点課題を「デジタルコンテンツの拡充」「利用者のニーズに応じた情報提供」「図書館ネットワークの構築および協力」という3つのテーマに大きく区分して紹介したいと思います。


### 3. 推進課題

#### 3-1) デジタルコンテンツの拡充

国立中央図書館は、オンライン資料の収集と保存に必要な制度的根拠を整備するために、2009年9月に「図書館法」を施行しました。主要内容は、同法第20条の2を新設して保存価値が高いオンライン資料を収集しなければならないと規定し、第20条を改正して障害者のための代替資料製作を普及させるために「デジタルファイル」納本を国立中央図書館が要請することができるようにしました。同時に、国立中央図書館では、2009年10月にオンライン資料の収集のため、「資料審議委員会」を編成・運営し、2010年1月に収集対象となるオンライン資料の種類、形態に関する告示を発表し、オンライン資料の収集を始めました。

また、国立中央図書館は、デジタルコンテンツの拡充および連携事業を推進しています。原文データベースは、これまで構築した39万冊・1億1,000万ページに加え、2010年には100万ドル（11億ウォン）を投資して1万冊をデジタル化する計画です。

デジタル化の費用は、全額を国家財源から投資しています。

2009年度5月にデジタル図書館開館と共にオープンした「 ディブライリーポータル(<http://www.dibrary.net>)」は、国内外1,250の機関が保有する学術情報、公共情報、民間情報、海外情報など1億1,613万件のデジタルコンテンツを連携して提供することによってデジタルコンテンツのハブ機能を担っています。

また、2012年までにデジタル図書館を通じて全国公共図書館、専門図書館など4,000余りの図書館と連携する計画も立てています。

国立中央図書館は、利用者ニーズに合う新しい図書館サービス提供のために、インフラの拡充にも努力しています。過去5年間、1億1,200万ドル(1,237億ウォン)を投資して完工した国立デジタル図書館を開館したところです。また、韓国政府が行政複合都市として造成している世宗(セジョン)市に国立図書館分館を建設しています。2009年から始めて2013年に開館予定の世宗(セジョン)市国立図書館分館は、資料保存のための保存書庫と行政官庁の政策を補助する情報センターなどの役割を担う計画です。国立中央図書館内の施設も再整備し、2010年4月には障害者のための資料室である「障害者が情報を享受する場」を、同年11月には本館5階に地図資料室を新しく設置し、利用サービスを始めました。

### 3-2) 知識情報サービスの拡大

知識情報サービスの拡大のための課題として、図書館サービスのインフラ構築および再整備、利用者ニーズに合った新しいサービスの開発、障害者と社会的疎外階層<sup>1</sup>のための図書館サービスの強化を推進しています。

国立中央図書館は、2010年に330万ドル(36億ウォン)を投じてe-book、電子ジャーナルなど6万件を収集する計画であり、デジタル図書館で保有しているデジタル情報のうち、著作権に関係のない資料を利用者らが自由に活用することができるように、利用者の関心分野および特化資料を中心にデジタルコレクションを構築して、デジタル図書館開館1周年となる2010年5月には試験サービスを開始しました。

また、2010年に韓国のスマートフォンの普及率が300万台を超えると予想されることから、スマートフォン専用アプリケーションを開発し、2010年5月にモバイルサー

---

<sup>1</sup> 訳注：英語では“a neglected class of people”と訳される。情報や経済的な社会的弱者の層を指す。

ビス環境を構築して同年7月から本格的なサービスを始めました。

モバイルサービスは、国立中央図書館の資料を検索して、GPSと連動してその資料を利用できる最も近い周辺の図書館を案内するサービスです。このサービスは韓国で発売されたすべてのスマートフォンで提供され、スマートフォンのウェブブラウザで<http://m.nl.go.kr>を入力すれば利用可能です。今後は、無線インターネット上でも図書情報に簡単にアクセスできるようなサービスを準備しています。

そして国立中央図書館は、既存の図書原文データベース構築の方式で、音声、イメージ、動画等にデータベース構築対象を拡大し、開放型フォーマット上にあるコンテンツを収集して保存する計画です。

また、図書館利用者の便宜のために、貸出カード一つで全国の公共図書館で利用できる統合利用システム（One Card System）を構築して2010年に試験運営した後、全国の公共図書館に拡大する準備をしており、ディブライポータルに小中学校教育用のコンテンツを連携し、学校図書館でも利用することができるようにする計画です。

さらに、利用者対象デジタル情報教育プログラムを常設運営し、2009年韓国電子通信研究院（ETRI: Electronics and Telecommunications Research Institute）の先端技術で開発した「バーチャルリアリティ体験型童話口演プログラム」を2010年に試験運営し、2011年から全国の120の図書館に普及させて、子供たちに先端技術と読み聞かせを共に体験する機会を提供する計画です。

国立中央図書館は、障害者や情報疎外階層に対する図書館サービスの強化にも高い関心を持っています。2009年4月に開室して運営している「障害者が情報を享受する場」では情報資料についてのサービスはもちろん、障害類型別の各種の補助工学機器を備え、より自由な情報利用のために便宜をはかっています。

2009年5月には、国内初の「障害者ポータル」をオープンし、全国に散らばっている10万冊程の知識情報の統合検索を支援しています。同年11月には「障害者図書館サービス先進化方策」を発表して、一般の印刷物を読むことができない障害者の情報アクセスへの可能性を高めるために障害者代替資料2,000種類の拡充、障害者図書館統合資料管理システム（KOLASIA: Korean Library Automation System In Able）の構築、公共図書館の障害者サービス支援などのために努力しています。

また、障害者図書館サービスに対する社会的な関心と参加のために、デジタルファイ

ル著作権寄贈制度である「音の本を分かち合う場」を社会的キャンペーンとして展開しており、2010年7月から本を音読する「障害者電話サービス」を実施しています。そして国際デージーコンソーシアムに加入し、Global Accessible Library Project 事業にも参加しています。

さらに全国民が生活空間の中で容易にデジタル図書館サービスを利用することができるよう、農漁村山間僻地の351館の「小さな図書館<sup>2)</sup>」と連携サービスを実施しており、これを2012年までに全国約4,000館の「小さな図書館」に拡大する計画です。そして農山漁村の疎外階層が利用する際に課されるデジタルコンテンツ利用料は、国立中央図書館が負担しています。

また、多文化家庭<sup>3)</sup>の子供のために童話口演の動画およびアニメーションをベトナム語、モンゴル語、タイ語、中国語、英語、韓国語など6か国語の字幕を付して製作し、オンラインサービスを提供しています。

国立中央図書館は、言語の障壁なく世界のデジタル情報にアクセスが可能になるように、OAIなどの開放型プロトコル基盤で標準化を進め、現在、推進されている韓国・中国・日本国立図書館デジタル図書館イニシアチブ(CJK Digital Library Initiative)を通じて韓国語、中国語、日本語、英語等の情報活用が可能になるようポータルを改善する計画です。

このように、韓国国立中央図書館デジタル図書館の‘Dibrary’ポータルは、新しいサービスのために努力しており、今後も発展していくでしょう。

### 3-3) 図書館ネットワーク構築および協力

国立中央図書館は、国内外の図書館との協力強化のための課題として、世界の図書館とのグローバル・ネットワークを強化し、国内図書館との協力サービスを推進しています。国立中央図書館は、世界各国の図書館と交流協力を積極的に推進しています。国立図書館との協力関係を申し上げれば、アジアはもちろんアメリカ、ヨーロッパ、アフリカなど14か国の図書館16館と了解覚書(Memorandum of Understanding)を締結

---

<sup>2)</sup> 訳注：韓国国立中央図書館では、2006年4月から専任チームを設置し、地域密着型の読書施設「小さな図書館」の建設を推進している。これは、居住地から歩いて10分くらいのところに、30～50坪程度の「小さな図書館」を作り、読書・文化プログラムを提供するというもの。

<sup>3)</sup> 訳注：多文化家庭とは、近年増加している「国際結婚により構成される家庭」のこと。韓国男性と東南アジア等の発展途上国出身の女性による国際結婚が大半を占めており、一般の韓国人家庭に比して教育への関心や子どものリテラシーの低さが問題視されている。

しました。

また、アジア、アフリカ、南米地域との交流増進のために「司書招請研修プログラム」を2006年から実施しています。4か国から1名ずつ招請された司書は、6か月間、司書実務研修と韓国語教育を受けており、2009年までに11か国16名の司書が参加しました。そして2010年10月には、ASEAN 10か国20名の子ども担当司書を対象に、専門研修を実施しようと準備中です。

国立中央図書館では、2010年6月14日には「知識社会における国家図書館リーダーシップ」を主題に、ブルーノ・ラシーヌ フランス国立図書館長等の主要国国立図書館長が参加し、デジタル図書館開館1周年を記念して図書館発展について役に立つ情報を交換する国際的な会議を開催しました。

また、韓国の資料に関心を持っている海外の国立図書館を対象に、2007年から韓国資料室設置を支援しています。2009年までにベトナム国立図書館をはじめとして9館に設置し、2010年にはイランとエジプトの国立図書館に各々設置する計画です。そして現在、海外の韓国学講座開設大学および図書館、合計12か所に原文データベースを提供しています。

国立中央図書館では、国内公共図書館の協力事業活性化のために毎年4つの事業を支援し、図書館間協力によりオンラインを通じて利用者の質問に答える「司書に尋ねて下さい」(CDRS)を運営しており、国家資料共同目録(KOLIS-NET)を活用した国家相互貸借サービス(inter library loan)を運営して国民にサービスしています。

国立中央図書館では、2009年に新しいサービスのための主要事業を推進した結果、訪問利用者は4%増加し、サイバー利用者は28%増加しただけでなく利用満足度も上昇しました。

#### 4. 結論

本日は、韓国の国立中央図書館が推進している図書館サービスについて発表しましたが、これと同様に国立国会図書館でも新しいサービスについての計画が多いことと存じます。

進化していくインターネット情報環境と増加するデジタル情報資源に対して、図書館がどのように収集保存して対応していくべきなのかという点は、最近、国立中央図書館が直面している悩みでもあり課題でもあります。また、インターネットに熟練したデ

デジタルネイティブ<sup>4</sup>な利用者が図書館に期待する要求に適切に対応しなくてはならない状況でもあります。これらの者からの要求は、単独の図書館が対応して解決できる課題ばかりではないため、国内外の図書館の連携・協力を通じて多様なコンテンツを共同活用することによって、より発展的なサービスを提供することができると考えます。知識情報が国際化、ブロック化していくことにより、図書館間の国際的な協力がより一層必要とされています。

これまで過去14年間の韓日国立図書館間の業務交流を通じ、新しく遂行すべき課題の解決のためお互いの経験の情報を交換してきたように、今回の業務交流でも、両国の国立図書館が直面している諸課題に対して互いに連携、協力していくことに寄与できるよう意義深い席となることを願います。

---

<sup>4</sup> 訳注：デジタルネイティブ (digital native) とは、生まれた時からインターネットやパソコンのある生活環境の中で育ってきた世代のことである。